

## 港町・美保関

美保関は、絵に描いたような三日月型の湾に浮かぶ、歴史のある小さな港町です。古くから、江戸（東京）や大阪との間で鉄や陶器、酒などを運ぶ北前船や、アジア大陸との貿易を行う船の港として栄えてきました。現在では、地元の船団は貿易ではなく漁業に専念していますが、町にはかつての風情が残っています。

### 美保神社の神々

港には、美保神社の入口を示す大きな鳥居が立っており、湾やそれを囲む岬に神聖な雰囲気を感じさせています。この神社は8世紀に遡るもので、恵比寿神を祀っています。恵比寿は事代主としても知られており、漁師と商売を守り、経済的繁栄を約束してくれる神です。また、子孫繁栄、夫婦円満、そして安産の女神であり、詩と踊りと音楽の女神でもある三穂津姫も祀られています。この神社は、本殿が2つ並んでいる珍しい配置で、森が生い茂った斜面の中腹で本殿が一体化しているのが特徴です。恵比寿は、二御前と呼ばれる左側の本殿に祀られ、三穂津姫は大御前と呼ばれる右側の本殿に祀られています。その間には「装束の間」と呼ばれる部屋があります。神社によくあるように、祭礼の際には神事中の神主のみが入ることができます。これらの周囲は屋根付きの杉材の柵で囲まれており、上の方には薄板に隙間があるので、境内の内側の一部を見ることができます。

現在の本殿は1813年に建てられたもので、主に地元の松材を使用し、杉板葺きの屋根が厚く、出雲大社に由来する「大社造」と呼ばれる様式になっています。高い木の柱の上に建てられ、急な屋根付きの階段で登ります。両殿の男女の対比が、屋根の上の千木という装飾にも表れています。男性である恵比寿が祀られた本殿の千木の先端は垂直に切られています。女性である三穂津姫が祀られた本殿の千木の先端は水平に切られています。これによって、遠くからでも神の性別を簡単に見分けられます。神社の主要社殿群は、国によって重要文化財に指定されています。

### 屋根付きの集会所

本殿の正面には、本殿の一部を隠すように、大きな拝殿があります。拝殿は祈りのための社殿で、壁がありません。これは、日本の神社建築としては異例であり、有名な日本人建築家の伊東忠太が1928年に設計したものです。高い石の基礎の上に建てられ、幅広い石段でつながった拝殿は、檜材で作られており、屋根は杉張りとなっています。全体の形と構造は、大きな船屋に似せられており、内部は奥まで広々としています。多くの人々が神事や奉納に集まっても入れるようになっています。拝殿を支える柱組みは全て内側から見ることができ、比較的新しい建物ですが、最上級の素材

と職人芸という、極めて伝統的な美学があらわされています。周囲の屋根付きの廊下や中央の門も、この社殿の一部です。

#### 港の前の「青い石」

美保神社から港に向かう道からは、細い歩行者用道路が左に分岐しています。この通りは、水に濡れると青みがかった石畳になることから「青石畳」と呼ばれています。港に平行して走り、数百メートル先にある美保神社から佛国寺へとつながるこの道は、長い間町の表通りでした。江戸時代（1603-1867）に街が繁栄すると、この通りの両側には船問屋が軒を連ね、船乗りや巡礼者のための旅館が軒を連ねるようになりました。その多くは港の前に位置しており、船が停泊する浜辺に隣接していました。18世紀後半には、物資の運搬の往復を容易にするために石畳が敷かれ、狭い路地が港前の施設の間を縫うようにつなぎ、船からの荷物を青石畳通りに運ぶのに使われました。

#### 活気ある繁華街

19世紀の作家小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、その著作の中で、湾の穏やかな海に映る港町の旅館や歓楽街の上層階に数百個の提灯が並び、船乗りや賭博師、芸者、踊り子などが夜な夜な騒いだ光景を描いています。今日ではこうした様子を見ることはできませんが、「美保館」をはじめ、今も17世紀から続く多くの酒場や旅館が残っています。現在の建物は1908年に建てられた歴史的なもので、中庭を囲むように数段の階に宴会場が配置され、ガラス張りの屋根で覆われているもので、国の重要文化財に指定されています。また、青石畳沿いには、明治時代の船乗り宿を改装した「美保関資料館」があり、港の歴史や貿易を行っていた貨物船の歴史を知ることができます。美保関資料館では、町の歴史を紹介するとともに、裕福な鷗鷗家から寄贈された17世紀後半まで遡る歴史的な遺物や美保神社の神事の写真などが展示されています。

#### 古代の神話の場面の再現

美保関の最も古い伝統は、毎年行われる2つの水上神事です。この諸手船（もろたぶね）神事は、天からの使者が舟に乗って美保関にやってきて、出雲の地を明け渡すために恵比寿神と交渉したという古代神話「国譲り」にちなんで行われます。毎年12月3日の午後に行われるこの神事では、6人の漕ぎ手と3人の乗組員を乗せた2隻の大きな舟が沖に出て、次に港に戻る競争を行います。港では互いに面して、櫂で冷たい海水を掛け合い、戦いの様子を再現します。船は色鮮やかに装飾され、神事の期間中以外はガラス張りの宝物庫で展示されています。

4月7日に行われる青柴垣（あおふしがき）の神事は、国譲り神話のもう一つの場面を

再現したものです。父の大国主命（おおくにぬし）が太陽の女神である天照大神（あまてらすおおみかみ）に土地を譲ることを承諾した後、恵比寿は、目に見える世界から消えて、自分の船で海に出て青柴垣を張り巡らせた中に隠れることを決意しました。この13日間に及ぶ神事の折り返しの日には、恵比寿の隠れ家を再現するために、青柴と幕で飾られた2隻の漁船を港で括り付けます。漁船には伝統的な衣装に身を包んだ2つのグループが乗り込み、近くにある別の漁船では神聖な踊りや音楽が演奏されます。その後、美保神社の入口である鳥居の下に船を沈め、全員で参拝して神様にお供えをします。青柴垣は春の始まりと生命の成長を、諸手船神事は冬の始まりと生命の終わりを告げるものです。